異形・異類の子どもたちが教えてくれること：神格化、別離、そして共存へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪樟蔭女子大学 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒川, 麻実, 川上, 正浩, 坂田, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4813

異形・異類の子どもたちが教えてくれること
―神格化、別離、そして共存へ―

児童教育学部　児童教育学科　黒川　麻実
学芸学部　心理学科　川上　正浩
学芸学部　心理学科　坂田　浩之

要旨：古来より人々は「人ならざるモノ＝異形・異類」と人の関わり合いを、神話や昔話の中で語り継いできた。この「異形・異類」と「人」が織りなす物語は、人の心性や文化を色濃く表現するものである。本研究では、異類婚姻譚や異常誕生譚を対象に、その中に登場する「異形・異類の子」が「境界」の中で、どのような道を選択したのか、分析を行った。その結果、「異形・異類の子」はマージナル・マン（境界人・周辺人）のままで生きていくことが極めて難しく、隠していくか、あるいは、境界線上の社会を脱し、いずれかの社会に同化していくことが必要だということが判明した。多様性や異文化を認め、他者を受容し共同的に社会を構築していくことが求められている今、対象とした話に登場した「異形・異類の子」の生き様から学ぶ必要性を論じた。

キーワード：異類婚姻譚、異常誕生譚、昔話、神話、妖怪

1. はじめに

2021 年現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）という、見えない厄災の蔓延化において、疫病退散の効力を持つとされる妖怪、「アマビエ」がブームになったことは記憶に新しい（今林，2021；伊藤，2021；松本，2020）。人々は古来より、自分たちの力だけではどうしようもない出来事に対し、昨今の「アマビエ」ブームからも見て取れるように、「人ならざるモノ＝異形・異類」に時に救いを求め、時に惹かれ、時に恐れてきた。「妖怪研究は、人間研究でもある」（小松，2000：449）という言葉にもあるように、この「異形・異類」と人との関わり合いを深く掘り下げていくことは、とりも直さず人そのものを検討することに他ならない。

このような視点から、黒川・川上・坂田（2021）では、「異形・異類」と人が「婚姻関係」を結ぶという、如実に「異形・異類」と人との関わり合いの様相が見て取れる「異類婚姻譚」に焦点を当て、研究を進めてきた。その結果、異類婚姻譚に登場する「異形・異類」は神（自然）やヨソモノ（他者性）の象徴であること、そしてそれらが人と接触する（婚姻関係を結ぶ）際、人の形に変化し臨む場合が多くあるということ、また異類婚姻譚の多くが婚姻関係の破綻という結末を迎えるということが明らかになった。また、心理学的な観点から見た場合、異類婚姻譚は、自然と人間との関係、醜く見えるが価値のあるヨソモノ（他者性）との関係、そしてこれらに対する急激な幻滅体験を象徴する物語であると言える。

これらのことから異類婚姻譚は、人間が「異形・異類」と向き合う際の「心の在り方」を示しており、ひいては現代社会において、自分と「異」なるものとの向き合い方を見直すきっかけとなり得ることが示唆された。

これらのことを踏まえ、本稿では、異類婚姻譚の結末の一つである、「異形・異類」と人の間に「子」が成される場合、すなわち「異形・異類」と人のハイブリッドに着目する。また、黒川他（2021）でも触れた「異常誕生譚」で登場する「異形・異類の子」についても考察の対象として取り上げていく。彼らが昔話や神話の中で、どのような経緯で登場し、どのような生き方を選択し、そしてその後どうなっていったのかについて分析を行うことで、「異形・異類」との向き合い方をより鮮明に描き出すことができると考えられる。先にも述べたように異類婚姻譚の多くが別れや死という結末を迎える。その中で、異類婚姻譚の先にある景色はどのようなものか、本研究を通してみていきたい。

2. 研究の対象となる「異形・異類」の子が登場する話

2.1. 異類婚姻譚における「異形・異類」の子の存在

本研究では、「異形・異類」と人の婚姻（＝異類婚姻

譚）の結果として誕生した子、及び「人」と「人」の婚姻の結果として誕生した「異形・異類の子」（＝異常誕生譚）を対象とする。すなわち、異類婚姻譚と異常誕生譚が中心となってくる。

黒川他（2021）において考察の対象とした、神話と昔話における異類婚姻譚は次の通りである【表１】。【表１】を元に、まず異類婚姻譚における婚姻状況および子の有無について整理する。

【表１】神話・昔話における異類婚姻譚の一覧

	異類聟	異類女房
神話	㋐神入聟（蛇型） ㋑神入聟（矢型） ㋒蛇入聟	㋓和邇女房 ㋔蛇女房 ㋕狐女房 ㋖亀（竜宮）女房 ㋗白鳥女房（羽衣伝説）
昔話	①蛇聟入・苧環型 ②蛇聟入・水乞型 ③河童聟入 ④鬼聟入 ⑤猿聟入 ⑥蛙報恩 ⑦蟹報恩 ⑧鴻の卵 ⑨犬聟入 ⑩蜘蛛聟入 ⑪蚕神と馬 ⑫蚕由来 ⑬木魂聟入	⑭蛇女房 ⑮蛙女房 ⑯蛤女房 ⑰魚女房 ⑱竜宮女房 ⑲鶴女房 ⑳狐女房 ㉑猫女房 ㉒天人女房 （㉓鬼の子小綱）

神話の場合は、「異類である神と人間の結婚により、神の子が人間界にもたらされ、一族の祖となる始祖伝説が原話であると考えられている」（小林，2007：47）ものが多く、例えば㋐神入聟（蛇型）の場合、子は意富多多泥古（おほたたねこ）と称され、神の子としての扱いを受ける。㋓和邇女房では子が後の神武天皇の父親であるとされている。㋕の狐女房も同様に子が偉大な存在であると語られている。㋖亀（竜宮）女房や㋗白鳥女房（羽衣伝説）では、採録されている書物によって結末が異なり、子を成し地上に置いていくパターンと子を成さないパターンなど様々である。神話において「異形・異類の子」が登場する話として類似するものを整理すると、「神入聟（蛇型）」「和邇女房」「狐女房」が研究対象となる。

昔話の場合は、①－⑬に見られる異類聟の場合、基本的に「婚姻不成立型」であり、子を成していない。①蛇聟入・苧環型の場合は堕胎という手段をとっているため、子の存在は語られていない。一方、異類聟と比べ異類女房が登場する異類婚姻譚（⑭－㉖）は、子の存在がある昔話が多い。例えば⑭蛇女房では、蛇に化けた女房と人との間に子が産まれるが、本来の姿を見られたことで子を残して立ち去るという話である。同じような構造として、⑳狐女房、㉒天人女房が存在するが、⑳狐女房の場合、神話における㋕狐女房と同様、子が成長した際に出世する結末の類話も存在する。また鬼と人の子が登場する㉓鬼の子小綱は逃避譚に類する昔話であるが、鬼と女が婚姻する話のため、本研究では異類婚姻譚に位置づける。鬼の子小綱は、題名にあるように、鬼である「異形・異類」と人との間に子が産まれ、その子に焦点が当たった珍しい昔話である。そこで、昔話において「異形・異類の子」が登場する話として類似するものを整理すると、「蛇女房」「狐女房」「天人女房」「鬼の子小綱」が研究対象として挙げられる。

2.2. 異常誕生譚における異形・異類の子の存在

次に、「異形・異類の子」が登場する話として「異常誕生譚」について取り上げる。関（1953）における『日本昔話大成』に取り上げられている異類誕生譚を整理すると【表２】になる。

【表２】異常誕生譚における親と子の概要

話型	親	子とその後
田螺息子	爺・婆	田螺→立派な若者
蛙息子	夫婦	蛙→立派な青年
一寸法師	夫婦	小さな男児→一人前の男
指太郎	年寄りの夫婦	小さな男児→変化なし
手斧息子	みしげ殿 （女親は不明）	脛に手斧手には鉋→普通の人間の身体に
力太郎	不精な爺と婆	爺と婆の垢→変化なし
蛇息子	夫婦	成長に伴い蛇の様相
桃の子太郎	爺と婆	桃から男児が誕生
瓜子織姫	爺と婆	瓜から女児が誕生→天邪鬼によって殺害
竹の子童子	三吉	竹の中から男児が登場
子育て幽霊	父と母（出産前に死亡）	墓から男児が出てくる→通幻という名僧に
笛吹聟	爺と婆	神の願掛けで出産→笛の名手となり天女と婚姻

【表２】にある通り、異常誕生譚の子は、異類婚姻譚と異なり人と人の間で登場している。ただ、登場経緯については話型によって異なる。高橋（2010）では、夫婦が子どもを授かる８話（「五分次郎」「一寸法師」「たにし長者」「笛吹聟」「こんび太郎」「桃太郎」「蛇むすこ」「瓜姫」）を取り上げ、通常の出産形態のうち通常の出産形態（自然分娩・異常分娩）、通常外の出産形態（体由来の物質・植物の実）があると述べている。また、途中で「異形・異類」の姿から戻るのか、また結末は幸せな生活を送るのかについても話型によって異なっている。そこで、妊娠・出産時、成長時、結末部という観点で整理すると【表３】のようになる。

【表 3】異常誕生譚における子の登場形態や変化

A 妊娠・出産時	**①妊娠し分娩という形で登場する** 田螺息子・蛙息子・一寸法師・親指太郎・手斧息子・蛇息子・子育て幽霊・笛吹聟 **②来訪という形で登場する** 桃の子太郎・瓜子織姫・竹の子童子 **③妊娠ではないが両親の一部を受け継いで登場** 力太郎		
B 成長時	**①人から遠い異形の姿**	㋐異形のまま	蛇息子
		㋑人の姿に変化	田螺息子・蛙息子
	②人と近しい異形の姿	㋐異形のまま	指太郎
		㋑人の姿に変化	一寸法師・手斧息子
	③人の姿をもつ	力太郎・桃の子太郎・瓜子織姫・竹の子童子・子育て幽霊・笛吹聟	
C 結末部	**①死亡**（瓜子織姫） **②不明**　蛇息子・竹の子童子 **③出世・所帯を持つなど幸せな生活を送る** 田螺息子・蛙息子・一寸法師・親指太郎・手斧息子・力太郎・桃の子太郎・子育て幽霊・笛吹聟		

なお、類話によっては妊娠・出産時における描写、また結末部は類話によって異なるものがある。例えば親指太郎は、自然分娩で登場するものと、親指が膨れてそこから登場するというものがある。また、瓜子織姫は天邪鬼に殺害される話と、爺婆に救出される話があり、蛇息子も爺婆に頭を切られる話と、山でそのまま過ごす話がある。【表3】においては、『日本昔話大成』資料に代表話として掲載されているものを取り上げた。本研究では「異形・異類の子」がテーマのため、【表3】における「B 成長時」の「③人の姿をもつ」に類する話は対象外とする。それ以外において、「㋐異形のまま」から「C 結末部」において「②不明」を迎える「蛇息子」、「③幸せな生活を送る」を迎える「指太郎」と、「㋑人の姿に変化」は「③幸せな生活を送る」と同じ結末を迎えているため、代表として「田螺息子」を取り上げる。

2.3. 本研究で取り扱う「異形・異類の子」の登場する話

以上を踏まえ、本研究では「異形・異類の子」の登場する話として、類似する話型の話を整理し、いくつかの神話・昔話を絞って以下のものを取り上げる。

【表 4】研究対象とする異形・異類の子の登場する話

	神話	昔話
異類婚姻譚	・神入聟（蛇型） ・和邇女房 ・狐女房	・蛇女房 ・天人女房 ・鬼の子小綱
異常誕生譚	・田螺息子 ・蛇息子 ・指太郎	

【表4】に挙げられた話について、両親がどのような「異形・異類」もしくは人なのか、またどのような形で妊娠・出産を迎えたのか、そしてその子はどのような人生を歩んだのかについて、各話のあらすじを提示すると共に、検討・考察を加える。その上で、「異形・異類の子」の位相を俯瞰的に確認し、「異形・異類の子」の歩む道から何が見えてくるのかについて見解を述べる。

3.「異形・異類の子」の登場する話の詳細分析

3.1. 日本の異類婚姻譚における「異形・異類の子」

3.1.1. 神入聟（蛇型）の検討

①あらすじについて：『古事記』より

陶津耳命（すえつみみのみこと）の娘であり、美しい形姿の活玉依毘売（いくたまよりひめ）の元に夜毎通う立派な身なりの男がいた。そのうち、姫は身ごもった。男の正体を知りたいと思った父母が、娘に男の裾に糸を縫い付けさせ、その糸を辿っていくと、戸の鉤穴を抜け、美和山の神の社に辿り着き、男の正体が三輪山の神であったことが判明する。生まれた子は三輪氏の祖、意富多多泥古（おほたたねこ）（大田田根子）となる。

②両親に対する検討

父親は三輪山の神、母親は美しい姿形の人間である。母親は、相手が異形であることを知らずに関係を結ぶ。

③妊娠・出産時及び成長について

妊娠・出産時の様子については、語られていない。

④結末・その後について

生まれた子である意富多多泥古は、三輪氏あるいは賀茂氏の祖とされる。『日本書紀』にも、崇神（すじん）天皇の世に疫病が流行したが、意富多多泥古を神主にして大物主神を祀ることによって、疫病がやみ、国が平らかになったとの記載がある。

⑤「神入聟（蛇型）」の考察

この異類婚姻譚は、神である異形（蛇）と人間との婚姻譚であるが、これは子である意富多多泥古の誕生譚でもある。このエピソードにより、意富多多泥古は神の子として扱われ、意富多多泥古を、さらには三輪氏を神格化するデヴァイスとして、この「三輪山伝説」が存在していると考えることができる。

同様に、『古事記』中巻には、神入聟（矢型）の神話として、以下のような話がある。

美女として知られていた勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）は、大物主神に見初められた。大物主神は丹塗り矢に姿を変え、大便をするところの勢夜陀多良比売のほと（女性器）を突き、勢夜陀多良比売は懐妊する。矢は美形の男となり、両者は結婚して娘が生まれた。生まれた娘は「富登多多良伊須須岐比売（ほとたたらいすすきひめ）」と名付けられたが、娘はのちに「ホト」という名を嫌って、名を「比売多多良伊須気余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）」に改めた。のちに「ホト」という名を

嫌い、名を「比売多多良伊須気余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）」に改めた。

この、異類婚姻譚においても、こうして生まれた比売多多良伊須気余理比売が神武天皇の皇后であったことを考えると、皇后を神格化するためのデヴァイスとして機能していることがわかる。

荒川（2000）は、蛇聟入（苧環型）は、その最終的な展開により、最終的な展開の相違により、災いを祓う節句行事の起源を語るものと、異類婚による家の系譜を語るものに分かれることを指摘している。そして、家の系譜を語る説話の場合は、その子孫は「平家物語における緒方三郎や信濃の小泉小太郎の様に、超人的能力を発揮したり、英雄視される人物」となっている（荒川，2000）。この「三輪山伝説」では、そこで生まれた子どもは三輪氏の始祖となり英雄視されることとなる。呉（2011）も、「三輪山伝説」や、平家物語における緒方三郎について論じる中で、「古代人には、鰐とか蛇とかいう最強の力を有する爬虫類を祖霊とする思想があった」（呉，2011：18）と述べている。すなわち、最強の力を有する蛇であり、かつ神である大物主神の血を引く存在として意富多多泥古を描くために、この異類婚姻譚が利用されている。

3.1.2. 和邇女房の検討

①あらすじについて：『古事記』より

海神の娘である豊玉毘売（とよたまひめ）（豊玉姫）が彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）（＝山幸彦）の子を宿した。陸の産屋に籠った豊玉毘売は、出産に際し、絶対に中を覗かないようにと言ったが、彦火火出見尊が我慢できずに産屋を覗くと、豊玉毘売は八尋和邇に姿を変えていた。これを恥じた豊玉毘売は生まれた子を残し、海に去った。子である鵜葺草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと）はその後、姫の妹である玉依毘売（たまよりひめ）（玉依姫）と結婚し、後の神武天皇が誕生した。

②両親に対する検討

父親は神である彦火火出見尊、母親は海神の娘である豊玉毘売である。彦火火出見尊にとっては「異界」である海の世界で出会った女房である。

③妊娠・出産時及び成長について

妊娠時の様子はほとんど語られていない。出産時は、夫に対して「見るなの禁」を告げて八尋和邇の姿で出産するが、夫が「見るなの禁」を破って覗き見る。このため、豊玉毘売は海の世界に去るが、子どもは陸の世界で成長する。

④結末・その後について

生まれた子どもである鵜葺草葺不合尊は、後の新無天皇の親となる。

⑤「和邇女房」の考察

「和邇女房」の神話は、海神の娘であり八尋和邇である「豊玉毘売（豊玉姫）」と神である「彦火火出見尊（山幸彦）」との異類婚姻譚であると見なすこともできるが、ここでのフォーカスは、生まれた子が神武天皇の父親である鵜葺草葺不合尊であることにある。すなわち、黒川他（2021）でも指摘した通り、この異類婚姻譚も、天皇の系譜を神格化するためのデヴァイスとして機能していることがわかる。この神話において、海神の娘である豊玉毘売と結ばれるのが、「海幸彦」ではなく「山幸彦」であることで、山幸彦にとっての海の異界性が強調され、八尋和邇と化した豊玉毘売が「異形・異類」であることをより強く意識させるのであろう。さらに八尋和邇という「強さ」を象徴する血がつがれることで、鵜葺草葺不合尊が神格化される。

3.1.3. 狐女房の検討

①あらすじについて：『日本霊異記』より

欽明天皇の時代、美濃国の人が嫁となる女性を探していたところ、広野の中で美しい女性に出会い、家に連れて帰った。女性は妊娠したが、家の犬が吠えかかったところ、女性は元の姿である狐の姿になり、子を残し、家を去ってしまった。子は名を「岐都禰（きつね）」姓を「狐直」と名付けられ、足の早い大変な力持ちとなった。この子が今の美濃国の狐直たちの先祖である。

②両親に対する検討

父親は人間であるが、母親は人間（美しい女性）に化けた狐である。

③妊娠・出産時及び成長について

妊娠・出産時については、多くは語られていない。

④結末・その後について

生まれた子どもは力がとても強く、走るのは鳥が飛ぶように速かったとされている。さらに、この神話が、美濃国における「狐直」という姓の起こりであるとされている。

⑤「狐女房」の考察

狐女房についても、生まれた子どもに超人的な力があることが語られる話である。すなわち異類婚姻によって生まれる子どもは優れた力を持つとされ、その子孫である「狐直」姓の力をも保証しようとするデヴァイスであると解釈できる。そしてこの話で特徴的であるのが、子を残して去った異類女房に対しての人間である聟の対応である。狐の正体を表し、去っていく女房に対し、夫は、「汝と我との中に子を相生めるが故に、吾は汝を忘れじ。毎（つね）に来りて相寝よ」、つまり、お前とは子どもま

で生まれた仲であり、忘れられない。毎晩やって来て共に寝て欲しい、と声をかける。女房はその言葉に従い、毎夜寝床に来るようになったという。この逸話は、「キツネ（来つ寝）」の語源に関する解説としても機能しているが、「異形・異類」である女房が、その正体を表した後においても、これを迫害せず、受容するという関係性を人間である男が提案している点が興味深い。こうした「異形・異類」に対する態度が、この子どもに対する神格化を支えているものであると解釈できる。

3.1.4. 蛇女房の検討

①あらすじについて：関（1953）より

貧乏な一人暮らしの男が、道すがら美しい女に出会う。女は男と共に暮らすことを望み、一緒に暮らし始め、直に懐妊する。ところが出産の姿を絶対に見ないように女は男に求め、不審に思った男が覗くと、大蛇が子を抱いている。姿を見られた蛇は、乳の代わりに子になめさせるようにと、目玉を残し去る。男はある日不注意により目玉を無くしてしまう。大蛇は再び現れ残りの目玉を差し出すが、急に男が金持ちになったことを怪しんだ村人によって床の間に飾ってあった目玉を盗まれた。事情を知った大蛇は怒り、夫と子どもを避難させた後に水害を起こし、村を壊滅させる。

②両親に対する検討

父親は貧乏な人間、母親は大蛇である。母親は出産時までは人間の姿で暮らしている。

③妊娠・出産時及び成長について

妊娠時の様子は詳しく語られていない。出産時は、夫に対して「見るなの禁」を告げて蛇の姿で出産するが、夫が「見るなの禁」を破って覗き見たために、母親は乳の代わりの目玉を夫に渡して去る。子どもの成長の様子は語られていない。

④結末・その後について

蛇女房の子どものその後については語られていない。

⑤「蛇女房」の考察

川添（1986）によると、蛇女房が起こした水害は、実際に起きた地震とそれによる水害と関連づけられる。この説に基づくならば、子どもは、水害で生き残った人々ということが考えられる。また、鳥越（1984）は、蛇女房が子どもの乳の代わりに夫に渡した二つの目玉を、和邇女房に先立つ物語である、海幸山幸の神話において、山幸彦が舅の海神から授かった二つの玉（シオミツ珠・シオヒル珠）に由来するものであると論じている。この論を踏まえるならば、蛇女房の子どもは後の神武天皇の父神（鵜葺草葺不合尊（うがやふきあえずのみこと））に該当するが、鳥越（1984）は、蛇女房とその子どもの物語（「三井寺の鐘」）を、近江の国の支配者が琵琶湖に住む神霊から霊能を授かったという信仰が、伝説色を備えつつ昔話化されていったものとして捉えている。すなわち、蛇女房の子どもは近江の国の支配者の始祖ということになる。

3.1.5. 天人女房

①あらすじについて：関（1953）より

ある若者が、美しい着物（羽衣）を見つけ取ったところ、水浴びをしていた天女のものであり、天女はこれを返してほしいと懇願する。しかし若者は聞き入れず、羽衣が無いと天に帰れない天女は若者と暮らし始め、七年後に子どもが三人生まれる。ところが上の子の子守歌から羽衣を見つけ出し、天女は子どもと共に天界に帰る。男は残された手紙を元に天界に行きつき、天女の親によって出された難題を天女の助力で解決していくが、最後の瓜を割る難題に失敗し、その際に生じた川（天の川）によって隔てられてしまう。天女と子どもは織姫星とその近くの星になった。

②両親に対する検討

母親は天女であり、父親は人間である。人間である男が、天女の羽衣を隠し、人間界に留めおくことで、結婚に至っている。

③妊娠・出産時及び成長について

妊娠・出産時及び成長の様子については語られていない。子どもの姿形についても語られていない。

④結末・その後について

母親（天女）は、子どもの歌から夫が隠していた羽衣を見つけ出し、夫に手紙を残して天界に帰る。子どもは母親と一緒に天界に行く。その後父親との再会と再びの別れを経て、母親と一緒に星になっている。類話には、天界で両親と仲良く暮らしたというものもある。

⑤「天人女房」の考察

千野（2017）によると、「天人女房」は、七夕の由来話となっており、竹取物語（かぐや姫の物語）とも関連づけられる。また、川添（1986）によると、類話では子どもが地方豪族や王朝、宗教者の始祖となっている。これらのことを踏まえると、異常誕生譚と近しい話であると考えることができる。

3.1.6. 鬼の子小綱

①あらすじについて：河合（1989）より

木樵の男が仕事をしていると、鬼が出てきて、あんこ餅が好きかと聞く。男は女房と取り代えてもいいほど好きと答える。そこで、男は鬼のくれたあんこ餅をたらふ

く食べるが、帰宅すると妻が居ないので驚く。男は妻を探して、10年後に「鬼が島」を訪れる。そこに10歳くらいの男の子が居て、体の右半分が鬼、左半分が人間で、自分は「片子」と呼ばれ、父親は鬼の頭（かしら）で母親は日本人だと告げる。片子の案内で鬼の家に行き、女房に会った男は女房を連れて帰ろうとするが、鬼は自分と勝負して勝つなら、と言って、餅食い競争、木切り競争、酒飲み競争をいどむ。すべて片子の助けによって男が勝ち、鬼が酒に酔いつぶれているうちに、三人は船で逃げ出す。気づいた鬼は海水を飲み、舟を吸い寄せようとする。このときも片子の知恵で鬼を笑わせ、水を吐き出させたので、三人は無事に日本に帰る。片子はその後、「鬼子」と呼ばれ誰も相手にしてくれず、日本に居づらくなる。そこで両親に、自分が死ぬと、鬼の方の体を細かく切って串刺しにし、戸口に刺しておくと鬼が怖がって家の中にはいってこないだろう。それでも駄目だったら、目玉めがけて石をぶっつけるように、と言い残して、ケヤキの木のてっぺんから投身自殺をする。母親は泣き泣き片子の言ったとおりにしておくと、鬼が来て「自分の子どもを串刺しにするとは、日本の女はひどい奴だ」とくやしがる。そして、裏口にまわって、そこを壊して入ってくるが、片子の両親は石を投げ、鬼は逃げる。それからというものは、節分には、片子の代わりに田作りを串刺しにして豆を撒くようになった。

②両親に対する検討

小綱の母親は人間であるが、父親は鬼の頭である。母親には意志が認められず、あんこ餅が好きな人間の夫と鬼との契約により、さらわれて鬼の頭との間で小綱を妊娠・出産する。

③妊娠・出産時及び成長について

小綱の妊娠・出産時及び成長の様子については語られてはいない。成長に関しても、10歳頃までについては語られていない。

④結末・その後について

小綱は人間の世界で無視されて孤立し、居づらくなる。そして両親に自分の鬼の方の体を切って串刺しにして戸口に刺し鬼避けにするよう言い残して自殺する。

⑤「鬼の子小綱」の考察

「鬼の子小綱」は、人間と鬼の間にできた片子の悲劇として論じられている（河合，1989）。そして、「片子という異分子の存在を許さない一様性を尊ぶ社会の在り方、世間の力には抗しがたいとして、わが子の自殺を黙って見ている両親の態度、それらを日本人における母性の優位性」と結びつけて考える視点を提案している（河合，1989：255；黒川他，2021）。さらに、現代の日本人にとって「片子を自殺に追いやらず、さりとて西洋流の変身を期待して殺害することもなく、片子を生かし続けることにより、そこにどのような新しいファンタジーが創造されてくるかを見届けること、その新しいファンタジーを生きることに努力を傾けることが課題になるであろう」（河合，1989：268）と論じられている。

3.2. 日本の異常誕生譚における「異形・異類の子」

3.2.1. 田螺息子

①あらすじについて：関（1953）より

子どものない老夫婦が子どもを望み、水神に祈ったところ、婆は田螺を産む。田螺の息子は成長しなかったが、老夫婦は神からの授かりものであるからと、神棚に据え、大切に育てた。ある日、爺が町へ出かけようとすると田螺が馬に乗せて自分も連れて行くように頼む。爺は驚きつつも、馬に乗せると、田螺息子は馬を操るのが上手い。荷物運びを手伝うようになり、次第にその評判が村の長者の元に届く。村の長者は水神の御利益にあやかるためにも、自身の娘を嫁に出す。しばらくたち、田螺息子と嫁は祭りの日に水神にお参りにでかけるが、田螺息子は鳥に襲われ田んぼの中に落ち、嫁は見失ってしまう。嫁が泣いていると、後ろに立派な男が立っている。男は自身が元は田螺であることを嫁に告げ、水神の力で元に戻ったことを告げる。その後、田螺だった男と長者の娘は商売を成功させ、幸せに暮らした。

②両親に対する検討

田螺の両親は、両者ともに人間である。しかし、爺と婆という表記にあるように、田螺を孕んだのは自然の経緯ではなく、神の力をもって妊娠する。

③妊娠・出産時及び成長について

田螺の息子は両親から非常に大切に育てられる。出生からしばらくは神棚に祭り、田螺が馬に乗る際にも「水神様の申し子」であるからと止めなかった。このことから、両親は、田螺を息子という立場ではなく神からの“授かりもの”として神格化し崇めていたことがわかる。田螺の嫁についても、優しく信心深いため、田螺との結婚を受け入れ、父親である長者も娘を田螺の嫁にすることを反対するどころか、積極的に進めているという描写がなされている。

④結末・その後について

田螺はその後、水神様の力によって、人間の姿に戻る。そして、商売が成功し、親類縁者みな繁盛したとある。なお田螺はそのままの姿の際に生活に苦しんでいたわけではなく、嫁が積極的に爺・婆に仕えよく働いたので暮らし向きは良くなったとある。すなわち、人間の姿

になることによって、さらに幸せになったと解釈できる。

⑤「田螺息子」の考察

高橋（2010）は、田螺という「異形・異類の子」を老夫婦が受け入れる際に、神からの授かりものを不服と思うことすらなく神聖化するという無意識的努力が働いていると述べている。また、千野（2013）は、

> この物語の大きなテーマは信仰であり、そのおかげでたにしが人間の姿になったが、物語の後半に大きな役割を果たすのが嫁となる長者の娘である。娘は、夫婦のそのままを受け入れる姿勢を引き継ぎ、さらにその先を行く。（中略＝論者）娘の受容は、何かを期待したり見返りを求めてのものではない。受容することの重要性、そしてそこに神の祝福があることを教えてくれる。（千野，2013：24）

と、「田螺息子」が消極的な犠牲的精神ではなく、積極的に受容する精神が根底にあることを指摘する。後述するが、田螺長者は幸せな結末を迎える珍しいものである。「異形・異類の子」を神聖化するだけではなく登場人物全員が「受容」することが、幸せの鍵を握っていると考えられる。

3.2.2. 蛇息子

①あらすじについて：関（1953）より

年を取った子の無い夫婦が、神に願掛けをしたところ、急に嫁が孕んで一人の男の子を産み龍吉と名付ける。始めは人並みだった龍吉は、成長するにつれ体が長くなり、蛇のような姿となる。とうとう夫婦は、家の中には置けなくなり、山へ龍吉を捨てる。幾年か過ぎ、日照りが国を襲い、お代官が少しでも雨を降らせたものに褒美をやると布令を出し、夫婦は龍吉のことを思い出し、かつて捨てた山へと向かう。龍吉の名を呼ぶと大きな蛇が飛んできたので、夫婦が雨を降らすように頼むと、龍吉は雨を降らした。夫婦はお代官から褒美をもらい幸せに暮らした。

②両親に対する検討

龍吉の両親は、両者ともに人間であるが、田螺息子と同様、年を取っており、自然の妊娠ではなく神の力によって妊娠している。

③妊娠・出産時及び成長について

参照した話型では、生まれた時は人間の姿を持つが、のちに蛇のような姿にあると記されているが、類話によっては蛇の姿で登場しているものもある。田螺息子と対照的に、山へ捨てられてしまうが、「大事な子なので惜しくてならん」と本来は一緒に暮らしたい旨が述べられており、他の類話においても共通している。また捨てられた際に「嬉しそうにひょいひょいと、走って行ってしまった」とあり、人間である両親と異類である子の別離は悲劇的なものとしては描かれていない。

④結末・その後について

龍吉はその後、夫婦の願いを聞き入れ、雨を降らし、夫婦を幸せな生活へと導いている。「安気に親たちを過す事ができた」と結末部には書いてあり、龍吉のその後は描かれていないが、そのまま山で暮らしたと考えられる。また、類話によっては、蛇息子が人を食っていることを知った両親が、両者合意の上で首を取り、殿に献上したことで幸せを得られたという結末も存在する。

⑤「蛇息子」の考察

高橋（2010）は、上述の両親による蛇息子の殺害という類話を参照し、

> 子殺しを決意した際に自らが殺される覚悟をした点では、親として極限の境地にあったことがうかがわれるが、自らの手で子どもを殺して子どもが行ったことの始末をつけようとする考え方は、子どもを親とは別個の存在として捉えていないからこそできる発想であり、親から子への一体感は相当に強く、文字通り一体であった妊娠中と何ら変わらないように見える。（高橋，2010：296）

と述べている。すなわち田螺息子が神格化と信仰の力により受容されたことに対し、蛇息子は神格化というフィルターがかからなかったため、迫害・別離という道を辿ってしまったのだと考えられる。

また蛇息子は異類の姿をしたままであり、両親や人間の世界との別離がなされている。鬼の子小綱は片子で別離という形をとっているが、蛇息子は完全な異類として死亡もしくは異類の世界で生きることとなっている。

3.2.3. 指太郎

①あらすじについて：関（1953）より

年よりの夫婦が神に「豆のような子でも構わないから子を授けてくれ」と願う。すると、親指程の子が出来たので「豆太郎」と名付ける。ある日、豆太郎は爺に馬を操らせて欲しいと願い、豆太郎は上手く馬を乗りこなす。ある日それを見た旅の者が豆太郎を千両で譲ってほしいと頼む。爺は断ったが、豆太郎は考えがあると、旅の者についていく。豆太郎を使って悪だくみを考えていた旅の者から豆太郎は逃げ、蝸牛、藁、牛、狼と場所を転々とする。豆太郎は狼に、爺と婆の家に行ったら御馳走があるとそそのかし、狼は爺と婆の家に行き、驚いた爺によって殺されてしまう。すると狼の腹の中から豆太郎の声がするので、爺は豆太郎を救出する。爺と

豆太郎は再会を喜び、一緒に仲良く暮らした。

②両親に対する検討

豆太郎の両親は、両者ともに人間であるが、田螺息子・蛇息子と同様、年を取っており、自然の妊娠ではなく神の力によって妊娠している。

③妊娠・出産時及び成長について

話中では「間もなく子供が出来た」とあり、妊娠・出産の詳細は描かれていない。類話によっては、「親指が膨れて誕生」したものや「爺の腹が裂けて」など様々な誕生の様相が示されている。

指の大きさの子は「豆太郎」と名付けられ、大切に可愛がられたと記されている。豆太郎を手放す際にも爺は豆太郎に言われて仕方なく手放していることから、両親は豆太郎に愛情を注いでいる。ただし田螺息子と異なる点は、「水神様の申し子」と神格化されているわけではなく、あくまで一人息子として大切にされている点である。

④結末・その後について

豆太郎は爺の元に帰り、その後は両親の元を離れることなく暮らした、とある。また、豆太郎は人の姿に戻った等の記述は無く、異類の姿のまま、人間と共に暮らす道を選んだことになり、非常に珍しい形での結末となっている。

⑤「指太郎」の考察

関（1953）他によると、「指太郎」はグリム童話の「拇指小僧」と同一範疇に存する話であり、日本においては東北、中部、九州地方など比較的広い範囲に存在している。また類似する話として「一寸法師」が挙げられるが、一部類話を除き一寸法師は人間となる。

豆太郎は上述した通り、「異類」のまま、人間と共存という形を取り、そこに「神格化」というフィルターはかかっていない。太田（2003）は、グリム童話の小人と日本昔話の小人を比較し、次のように述べている。

> 『日本の昔ばなし』の小人たちは、中間的存在（神と悪魔・魔女＝論者補足）には違いないだろうが、悪魔や魔女的な所は一切なく、神々か神々に傾いた存在である。しかし、神々の分身のような小人はもちろんのこと、神々や天人の小人であっても、地上的、人間的で、あけっぴろげで、子供のように笑ったり喜びを素直に表す。（中略＝論者）小人たちは、自然宗教的、多神教的雰囲気の中で、姿を現す、人間に近い存在で、とても親しみがある（太田，2003：95）。

このように、指太郎が「蛇息子」と異なり、異類でありながらも受容された背景には、小人という存在が日本において人間的で親和性があることが大きいといえる。また両親が共に異類ではなく人間であること、指太郎の様相が人間と大きくかけ離れていないことも、排除対象とならなかったことの要因として考えられる。

4.「異形・異類の子」の位相について

4.1.「異形・異類の子」の包括的検討

これまで、日本の異類婚姻譚・異常誕生譚に登場する「異形・異類の子」を９話に絞り、概略的に取り上げた。次にこれらをまとめ、包括的な検討を加えていく。図中における点線枠は神話、実線枠は昔話を示している。まず、親の位相について確認する。「異形・異類の子」の親の属性を「ヒト」「異類」「神」に分類し位置づけた【図１】。

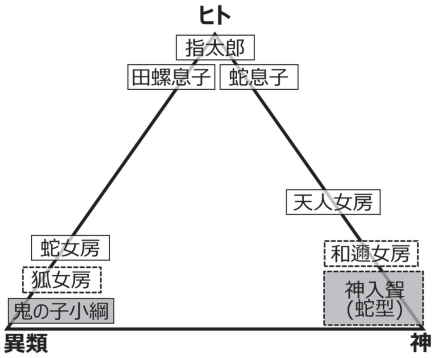

図１　「異形・異類の子」の親の属性について

親が異類ではなくヒトのものは、異類誕生譚とされる３話、「指太郎」、「田螺息子」、「蛇息子」である。そして、親のどちらかが「異類」に属するのは、上記以外の６話であり、そのうち話中に「神」であることが示されている３話、「天人女房」、「和邇女房」、「神入聟（蛇型）」は親が「神」であると位置づけた。

なお父親がヒト以外の存在であるものは「神入聟（蛇型）」、「鬼の子小綱」である。現実とは異なる世界である「異界」との交流を「旅行」と捉える橘（2010）は、異界旅行の経緯を旅行者の意思を基準として、Ａ.旅行者本人が異界への旅行を意図して、異界を訪れる「計画的な異界旅行」、Ｂ.ある人間が、偶然に異界を訪れることになる「偶然の異界旅行」、Ｃ.ある人間が、異界の存在によって、むりやり異界に連れて来られる「強制的な異界旅行」の３つに分類している。この分類によれば、「鬼の子小綱」は、はいずれもＣ型の強制的な異界旅行であり、その結果、子どもが生まれることになる。すなわち、ヒトの女性が異類の男性の子を成す場合は、蛇がヒトの姿に化けた「神入聟（蛇型）」を除き、強制的な異界旅行であり、同意のない妊娠である。

次に、「異形・異類の子」自体が「ヒト」「異類」「神」のどこに位置づけられているのかを【図２】に整理した。

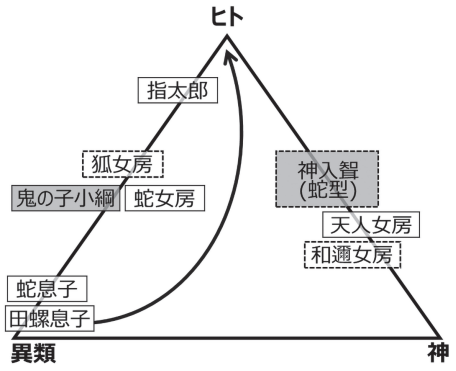

図２　「異類・異形の子」の属性について

基本的には、親の属性を引き継ぐような形で、それぞれの属性のハイブリッドとなっている。位置づけが変わっているものは、異類誕生譚の３話である。「田螺息子」・「蛇息子」は完全な異類（蛇や田螺）として描かれているが「田螺息子」は話中でヒトとなったため矢印で示した。「指太郎」は小人であるため、ヒトよりの異類として位置づけた。

最後に、「異形・異類の子」がどの世界で生きることとなったのかを【図３】に整理した。

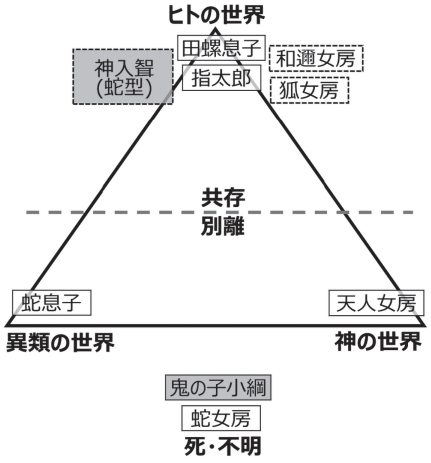

図３　「異類・異形の子」の子が生きる世界

ヒトの世界でヒトと共存していくことができているのは「神入智（蛇型）」、「和邇女房」、「狐女房」、「田螺息子」、「指太郎」である。このうち、神格化されることによって、ヒトの世界に受け入れられ共存の道を進んでいるのは、「神入智（蛇型）」、「和邇女房」、「狐女房」である。そして、神格化こそされていないが、幸せな結末を迎えているのが「田螺息子」と「指太郎」である。「田螺息子」はヒトの姿を得ているが、「指太郎」は小人のままである。

一方、ヒトとの別離を選び、神や異類の世界に帰った、もしくは死の世界へ逝ってしまったのは「天人女房」、「蛇息子」、「鬼の子小綱」であり、結末が不明なのは「蛇女房」である。このうち、異類の親に附属する形で神の世界側に渡るのは「天人女房」、自ら異世界・死の世界を選ぶのは「蛇息子」、「鬼の子小綱」となっている。

そして【図４】は、「異形・異類の子」のその後の人生が幸福なものであったか、また不幸なものであったかについてと、妊娠経緯と結末をまとめたものである。

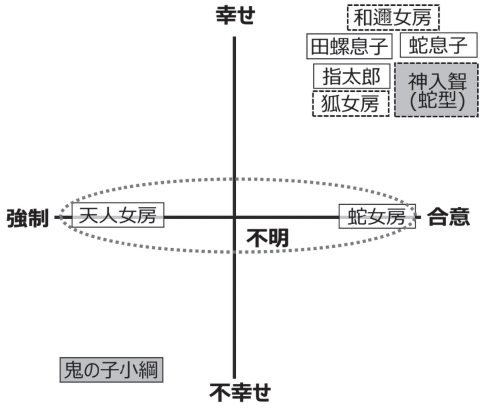

図４　「異類・異形の子」の妊娠経緯と結末

横軸は主に女性の側が、望んだ妊娠であった（合意）か、否か（強制）である。また、縦軸は、「異形・異類の子」の生存に関わらず、話中での記述を元に論者が幸福か不幸かを判断した。まず、女性側の強制的な妊娠の結果「異形・異類の子」が産まれた２話であるが、「天人女房」は神の世界へ行ったが、幸せかどうかは不明である。「鬼の子小綱」は自死しているため不幸せである。「神入智（蛇型）」は合意の上であると位置づけ、結末も幸福なものであると考えた。

次に女性側が望んだ妊娠である６話であるが、特に女性だけではなく男性側も子を望んでいる異常誕生譚３話は結末が幸せなものとなっている。女性が望んで妊娠した「和邇女房」、「狐女房」、「蛇女房」のうち、「和邇女房」と「狐女房」の子は最終的に富や力を得ているため、幸せであると判断した。蛇女房は子の結末が描かれていないため不明である。

ここでは、「不幸せ」の位相に、「鬼の子小綱」のみが配置されているが、異類婚姻譚の中で、その「子」の運命は、「生まれない」という形での「不幸せ」として描かれていることにも触れておく必要があるだろう。たとえば、「蛇聟入（苧環型）」の中には、以下のような話がある。

> 娘のもとに、美しい男が毎晩通うようになる。しかし男の正体を不審に思った両親が、男の着物の裾に糸をつけた針を刺すよう娘に指示する。翌朝その針を辿

っていくと、大きな淵（洞）の中まで続き、男の正体である瀕死の蛇とその母蛇が話しているのが聞こえた。蛇は、「娘の体には自分の子供が宿っている。娘が節句の酒さえ飲まなければ、子は決して死ぬことはない」と話す。これを聞いた娘と母は、酒を飲み、子を堕ろす。

これも、異形である蛇と人間の女性との異類婚姻譚であり、中盤までは「三輪山伝説」と類似の筋（プロット）である。しかしながら、その子が忌み嫌われて堕されるという結末が、大きく異なっている。この話は、節句酒を飲むことの由来を説明するための話として機能していることもある。同様のプロットで、菖蒲湯の起源（娘が菖蒲湯に入ることで堕胎がなされる）が語られることもあり、これは、荒川（2000）のいう、災いを祓う節句行事の起源を語るものに含まれるであろう。こうした説話について、柳田（1942）は、蛇という「異形・異類」が信仰の対象から、嫌悪される対象へと堕ちてしまったことを意味していると考えたが、そもそも、人間が有する、こうした「異形・異類」に対するアンビバレントな態度が現れていると捉えることもできよう。つまり、異類婚姻譚の子においては、生まれる前に堕胎される、という迫害の対象として描かれ、これは不幸せな誕生と見做されるべきであろう。そして、この堕胎される「異形・異類の子」が「生まれない」という不幸を迎えるのは、まだ生まれていない段階では、彼らはヒトと異形の境界線上に未だ留まった状態であるが故であると考えられる。

以上のことから、異類婚姻譚の結末の一つとして、「異形・異類」とヒトとの間に成された「子」については、以下の①から⑤のようにまとめることができる。

①神格化・英雄化されることでヒトとの共存の道を歩むことができる
②ヒトの姿を得る、ヒトの姿と近しい姿であることで神聖化・英雄化がなくとも共存の道が可能となる
③神聖化・英雄化がされず、かつヒトと遠い容姿や性質を有するものは、ヒトと共に生きることができない
④親の選択（道連れ）によってヒトが生きる世界で歩むことができない場合がある
⑤合意の結果として生まれた「異形・異類の子」は幸せな結末を迎える場合が多い

以上のことから、ヒトと「異形・異類」との境界線上に生まれた「異形・異類の子」は、そのままではヒトとの共存も、「異形・異類」との共存も不可能である。神格化・英雄化されることによってヒトを「超える」か、ヒトの姿になるかによってのみ、ヒトとの共存が可能になる、といえる。

4.2.「異形・異類の子」の境界と生きづらさ

つまり、「異形・異類の子」のこうした様相は、境界の物語としても読むことができる。河合（1989）は、片子の物語と帰国子女の関連に触れている。ここから西浦（2011）は、日本の帰国子女の事例とネイティブ・アメリカンの事例を取り上げ、片子はどちらの世界にも安住できず、あくまでも集団や文化に埋没しない「個」として深い孤独を抱えながら自分の世界を構築しなければならない存在、あるいは一つの文化や価値体系に埋没しないからこそ、他にはない創造的な「個」としての生き方が可能な存在であると論じている。また、飯島（1994）は、片子の物語が節分の豆まきの縁起物語となっていることから、冬と春の境界の物語であることに触れている。さらに、節分の「鬼は外、福は内」という豆まきの儀式から考えると、片子は「戸口」という内と外の境界に、死してとどまったと言えるかもしれない。今泉（2016）は、マージナル・マン（境界人・周辺人）の否定的側面を扱った物語として鬼の子小綱を挙げている。河合（1989）は、明確には片子に関する物語を境界とは結びつけて論じていないが、同書の中で「現代社会と境界性」について取り上げ、境界例の心理療法について論じている。このことから、河合（1989）の中では、暗黙には片子に関する物語と境界が結びつけられていたと考えられる。その河合（1989）の中では、「20世紀の科学において、明確に領域を区分する「線」としてみられてきた境界を、「領域」として見直し、その領域の探求に挑戦していくことが必要である」（河合，1989：324）と論じられている。

こうして「異形・異類の子」を改めてみると、ハイブリッドな存在は、そのままではヒトの世界の中で居づらさ・生きづらさを抱えることが窺える。ヒトの世界で生きるには、神格化されないならば、ヒトの姿を得るか、ヒトの姿に近しくないと排斥され、不幸な目に合うといえる。そのときに、どのような異類とのハイブリッドであるかも重要である。神の化身である「和邇」や「蛇」、神と近しい「天女」や「狐」など、地域によって神として扱われている存在とのハイブリッドの場合、神格化されやすく、一方「鬼」というヒトにとっての敵と見做される存在とのハイブリッドである「鬼の子小綱」は生きづらさを感じながら自死するという過酷な結末を迎えてしまう。あるいは、神や異類の世界に行くことで生きることができる。日本の昔話・神話からは、「異形・異類

の子」がハイブリッドな存在のまま、境界にしばらくの間でも生きてとどまるという選択肢はなく、常人と異なる異能者としてヒトの世界で生きるか、異類（神）として異類（神）の世界で生きるか、あるいは死を選ぶかしかないようにも思える。このように「異形・異類の子」が登場する話から、内の同質性と異質なものの隔離を好む日本人の精神性や文化を見て取ることができる。

5. おわりに

社会の境界線上の存在であるマージナル・マンは、マージナル・マンのままで生きていくことが極めて難しい。マージナル・マンとして生まれた「異形・異類の子」が登場する昔話・神話から見てとることができたのは、彼らが生きていくためには、マージナル・マンであることを隠していくか、あるいは、境界線上の社会を脱し、いずれかの社会に同化していくことが必要だということである。神話の昔、昔話の昔より、人は境界上の存在が幸せに生きる社会を想像せず、創造して来なかったと言えるのではなかろうか。しかし、「ボーダレス」の社会ともいわれる現代は、境界が消えゆき、人や物、情報があらゆる垣根を越え、行き渡るという指摘（田中，2015）もある。また、多様性や異文化を認め合い、他者を受容し共同的に社会を構築していくことが求められている。だからこそ、我々が今改めて日本の昔話・神話から学ぶべきことは多い。「鬼の子小綱」のような悲劇が起こらないために、また「田螺息子」や「指太郎」のように、「異形・異類」とされる存在を受容していくためには、我々はどうあるべきであろうか。境界なき現代において、「異形・異類の子」が生きる上での選択肢は変化しているのだろうか。マージナル・マンがマージナル・マンのままで生きやすくなる可能性はあるのだろうか。

2012 年に上映された『おおかみこどもの雨と雪』は、片子を生かし続けることによって創造された新しいファンタジーとして注目される。また、同じく細田守監督作として 2015 年に上映された『バケモノの子』は、人間の子どもが、自ら進んで異界に入っていく、というファンタジーである。こうした現代のファンタジーにおいて、異形や異類、片子、異界がどのように描かれるのかは、上記の問いに対しての答えを与える可能性もある。次稿では、『おおかみこどもの雨と雪』を始めとする現代の話、また海外における神話・昔話を対象として、さらに「異形・異類」との向き合い方を考えていく。

【注】

1）『日本昔話大成』の異常誕生譚に位置していた「寅千代丸」、「踵太郎」、「蜘蛛息子」、「竹姫」、「幽霊女房」、「鷲の育て児」は派生地域が少ない、異常誕生ではないという観点から除外した。また「笛吹聟」については、笛吹男と天女の異類婚姻譚として『日本昔話大成』では位置づけられているが、笛吹聟自身が異常誕生譚としての性質を持っているため、異常誕生譚に位置づけた。

【引用文献】

荒川理恵（2000）「蛇神婚姻譚と苧麻の呪力：「天なるや」歌詞解釈試論」『学習院大学上代文学研究（25）』，1-11

呉艶（2011）「異類婚姻譚におけるジェンダーの中日比較研究」『同志社国文学（75）』，14-26

飯島吉晴（1994）「胞衣笑いの深層：霊魂の交通」『比較民俗研究（10）』，36-64

伊藤龍平（2021）「アマビエ考：コロナ禍のなかの流行神（緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究）」『口承文藝研究（44）』，13-26

今泉岳雄（2016）「自分の物語として「泣いた赤おに」を読む」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要（6）』，1-15

今林直樹（2021）「沖縄の昔話と病」『沖縄研究ノート 30』，1-13

太田伸広（2003）「グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較：昔話に登場する小人たち」『人文論叢（20）』，69-95

河合隼雄（1989）『生と死の接点』岩波書店

川添裕希（1986）「昔話の叙述の展開とその構造：異類女房譚を例として」『三田國文（6）』，18-26

黒川麻実・川上正浩・坂田浩之（2021）「異類婚姻譚から見る異形・異類との対峙：昔話と神話を中心に」．『大阪樟蔭女子大学研究紀要（11）』，97-107

小林真由美（2007）「『日本霊異記』の異類婚姻譚：神話から仏教説話へ」『成城国文学論集 31』，35-53

小松和彦（2000）「妖怪：解説」『日本妖怪変化史』中外出版（小松和彦編（2000）『怪異の民俗学 2: 妖怪』河出書房新社，433-449）

關敬吾（1953）『日本昔話集成：第二部 本格昔話』角川書店

千野美和子（2007）「日本昔話にみる精神性」『仁愛大学研究紀要（6）』，1-11

千野美和子（2013）「日本昔話「たにし長者」にみる信

仰」『京都光華女子大学研究紀要（51）』，13-24
千野美和子（2017）「日本説話「竹取物語」におけるかぐや姫と翁について」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要（55）』，101-108
高橋裕子（2010）「日本の昔話における親子関係：子どもの発達と対象関係の展開」『人間科学研究紀要（9）』，55-64
田中崇恵（2015）『“異”なるものと出遭う：揺らぎと境界の心理臨床学』京都大学学術出版会
橘弘文（2010）「異界のホスピタリティ」『大阪観光大学紀要（10）』，125-134
鳥越皓之（1984）「蛇女房・目の玉型考：琵琶湖総合開発問題とかかわらせて」『桃山学院大学社会学論集（17）』，268-251
西浦太郎（2011）「「片子」に関する試論：河合隼雄「片側人間の悲劇」と片子の「子ども性」を手掛かりに」『京都大学大学院教育学研究科紀要（57）』，167-180
松本玲子（2020）「コロナ禍におけるアマビエ考（1）：子ども達との関係から探る受容と変容」，『明和学園短期大学紀要 30』，13-19
柳田国男（1942）『桃太郎の誕生』三省堂
吉田幹生（2009）「異類婚姻譚の展開：異類との別れをめぐって」『日本文学 58（6）』，12-19

【付記】本稿は、JSPS 科研費 21K13593 の助成を受けている。

What the Non-Human's Offspring in Heterogeneous Marriage Stories and Miracle Birth Stories Tell Us: Deification, Separation, and Live Together

Department of Childhood Education, Faculty of Childhood Education
Mami KUROKAWA

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Masahiro KAWAKAMI

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology
Hiroyuki SAKATA

Abstract

Since time immemorial, stories of the relationship between humans and non-humans（Igyo, Irui） have permeated myth and folklore. These tales of the intermingling of humans and non-humans are an expression of the mentality and culture of society. In this study, we analyzed the lives of non-human offspring and the world they choose to live in by focusing on heterogeneous marriage（Irui konin tan） and miracle birth stories（Ijyo tanjyo tan）. Non-human offspring live as marginal individuals with significant difficulty; they can either isolate themselves from or leave such a society, or assimilate themselves into it. Stories of the heterogeneous marriages and miracle births of non-human offspring are more relevant today than ever, when acknowledging diversity and accepting different cultures to build a collaborative society appears to be the need of the hour.

Keywords: Heterogeneous Marriage Stories, Miracle birth stories,Folklores, Myths, Youkai